永野金山ものがたり

写真提供：姫野勝巳さん

昭和二十八年（一九五三）七月、永野金山閉山。

第四代宮之城領主島津久通によって発見された永野金山は、寛永十七年（一六四〇）から昭和二十八年（一九五三）までのおよそ三百年にわたり、多くの金を産出し、薩摩藩の財政や開田事業、島津家の財政を担い、近代産業の礎を築きました。

当時、江戸幕府との関わりも深かった永野金山は、金山行政区が構成され、外藩からの行き来も盛んで、日本近代の先端鉱業技術も取り入れられていました。

最盛期には、旧横川町の山ケ野金山にかけて、人口一万二千人余りの街並みが賑わいを見せていました。

閉山から五十五年。今、金山集落では、地域の活性化に向けて、眠り続けた永野金山の歴史を解き放ち、残された金山史跡を活用した、金山の新たな歴史を刻もうとしています。

■永野（長野）金山歴史年表

年号（西暦）	主な出来事
寛永１７年（１６４０）	第４代宮之城領主島津久通（徳源）が，内山与右衛門に金山探査を命じ，夢想谷の地に金鉱露頭を発見する。幕府に報告し，稼業免許方を申請許可され，長野金山と号す。豊州（大分県）日出藩より熟練鉱夫を移住させる。
寛永１９年（１６４２）	１２月幕府より閉鎖の令下る。坑口閉鎖となる。
明暦　２年（１６５６）	幕府より再稼業の免許下る。金山奉行所が，山ケ野に移り，山ケ野金山と称するようになる。
寛文　７年（１６６７）	幕府巡検使に次のとおり答申する。金堀り人夫３，８７１人（男３，５１８人，女３５３人），佐志丁場〔旧宮之城町〕３８２人（男３６９人，女１３人）
正徳　元年（１７１１）	年産金量８２５㎏
文化　元年（１８０４）	年産金量５，６２５㎏（佐渡金山１，８７５㎏）鉱夫３，８０７人
明治　４年（１８７１）	島津家金山となる。
明治１０年（１８７７）	フランス人鉱山技師ポール・オジェ（４８歳）を雇い，蒸気応用搗鉱所を作るなど，機械化に努める。
明治１４年（１８８１）	太良郷曽木村（旧大口市）より分村して，永野村発足（長野を永野と改める）。
明治３５年（１９０２）	砂金取人組合をつくり，連帯責任で金の密売を防ぐ。
明治３７年（１９０４）	五代龍作館長の時に，８２万円の予算で大拡張計画をたてる。胡麻目坑を拡幅し，晒と三番滝に竪坑をつくる。鉱山診療所をつくる。
明治４０年（１９０７）	水天渕（旧隼人町）に発電所をつくり，採鉱，巻き上げ排水，搗鉱などを電化する。
明治４２年（１９０９）	鉱石運搬電車が走る。年産金量４２５㎏
明治４５年（１９１２）	西郷菊次郎（西郷隆盛の子）が鉱業館長に就任する。
大正１１年（１９２２）	薩摩興業株式会社とし，近代経営に改める。
大正１５年（１９２６）	永野搗鉱所全焼。最新式搗鉱製錬所を再建する。
昭和１８年（１９４３）	戦時体制による鉱山整備令で休山となる。
昭和２２年（１９４７）	麻生鉱業（福岡県）と島津興業が提携し，山ケ野鉱山株式会社を設立する。再開準備。
昭和２６年（１９５１）	操業再開。
昭和２８年（１９５３）	産金振るわず閉山となる。